

# 子規連句私解

## 獨吟百韻「灯ともさぬ」の巻

其十八 三ウ十二句 同折端

大 島 富 朗

田舎人皆口々に問ひかくる

たゞ迷ひ子のひた泣きに泣く

雑句、遣句の格。

何を「問ひか」けられても「迷ひ子」は只管「泣き」じゃくるだけで一向に要領を得ぬ様子である。

この「迷ひ子」を囲み前句の「田舎人」たちは持ち前の、単純素朴な好奇心という名の善意から矢継ぎ早々に「問」う。曰「どうしたの」「どこから来たの」「家は何処」「お父さんお母さんと逸れたの」等々。

今日でも行楽地の雑踏の中親兄弟と逸れた子供の泣き囀る姿、さして珍らしからぬ景といえる。時として「迷ひ子」の方が却って確りして居り、係員の質問にはきくと答え、狼狽えた迷親が迷子案内所に駆け込む例も少なからず見受ける。

子供が神隠しにより行方不明となるなどということは現代では到底信じ難いが、一方で営利目的の身代金略取目当ての誘拐と名を替えた犯罪行為として子供の行方不明が様々に報道され世間の耳目を集めたりもする。

又、人身売買目的の拐かしや幼児童への虐待が世界的に問題化される昨

今、こうした例も古くは説経浄瑠璃『さんせう太夫』の人買い山岡太夫を引くまでもなく、謡曲「隅田川」の典拠である木母寺梅若伝説が夙に有名。

同伝説は浄瑠璃・歌舞伎において「隅田川物」の世界をなし、初世團十郎『出世隅田川』、近松の『雙生隅田川』を始め数多くの作品を生み、特に江戸の歌舞伎狂言に取り入れられ、奈河七五三助の『隅田川続

倅』(通称「法界坊」)や河竹黙阿彌『都鳥廊白波』(同「忍ぶの惣太」)の佳作を残す。

ところで、逢魔刻頃に人攫いが出現、親の言い付けを守らなかつたり嘘を吐くような悪い子供を攫っては角兵衛獅子の親方などの芸人に売る話とか因果見世物や曲芸団に売る話など、或は時間を忘れて外遊びに打興ずる子供達を戒めるための、具体的で恐ろしい諭え話がそれ自体説得力を持っていた記憶はさして古いものではなく、昭和三十年頃まで生きていた。

小津安二郎の無声映画時代の短編『突貫小僧』(昭和四年、松竹蒲田作品)は、昼下りと覚しき路地裏で隠れん坊遊びする子供(鉄坊)を、良い隠れ場所を餌に首尾よく拐しに成功した気弱な人攫い(文吉)とその親分(権寅)が、拐した子供に翻弄され挺子摺る様子を面白可笑しく演出してみせた掌品で知られるが、その物語は、

今日は

人攫ひの出さうな

日和である

という、些か人を喰った三行分ち書きの字幕で始まる。

この「人攫ひの出さうな日和」という設定そのものが編綴きわまりない平凡な日常、即ち「日和」の延長線上にあり、拐し行為が決して特別な、珍らしいものでなく、市井の生活と背中合せに存在し、等しく子供の身上に起こり得ることを暗示していて秀逸である。

散髪したてらしい坊ちゃん刈りの、眼鏡を掛けた利発な子供を見た人攫ひの親分、高く売れると値踏みた彼は子分を誉めるが、物怖じしない子供の態度行動に手を焼き、始末に窮した揚句親分は一言子分に、捨てて来い、と命ずる。

即物的で無機質な言葉は拐された子供の生命と無縁な、乾いた非情さであり、血が行う人間扱いと異り、恰かも物品扱いそのものである。

不用とならば直ちに捨てる。拐したものの、手に負えぬと判断した時躊躇なく捨てるのであり、子供は見ず知らずの場所に捨て置かれたのである。偶々拐された元の場所近くに捨て置かれた子供は再び両親の許に戻る可能性が残されるが、多くの場合、梅若丸と同じ運命を辿ったに違いない。

思わぬことから人商人に誘われた我子の行方を尋ねて東の国隅田川に行き着いた母（シテ）、渡守（ワキ）の口から一人子の死を知る。

その語りは、

ワキ（語）「さても去年三月十五日。しかも今日に相當りて候。人

商人の都より。年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひ取つて奥へ下り候が。この幼き者。未だ習はぬ旅の疲れにや。以ての外に違例し。今は一足も引かれずとて。この川岸にひれふし候を。なんぼう世には情なき者の候ぞ。この幼き者をばそのまま路次に捨てて。商人は奥へ下つて候。さる間この邊の人々。この幼き者の姿を見候に。由ありげに見え候程に。様々に痛はりて候へども。前世の事にもや候ひけん。ただ弱りに弱り。既に末期と見えし時。おことはいづく如何なる人ぞと。父の名字をも國をも尋ねて候へば。われは都北白河に。吉田の何某と申しし人の唯ひとり子にて候が。父には後れ母ばかりに添ひまるらせ候ひしを。人商人にかどはかされて。かやうになり行き候。都の人の足手影もなつかしう候へば。この道のはとりにつきこめて。しるしに柳を植ゑて給はれとおとなしやかに申し。念佛四五返唱へ終に事終つて候。なんぼうあはれなる物語にて候ぞ（略）

この長物語、付け味そのものといつてよい。前句の「田舎人」が即ち「この邊の人々」、「口々に問ひかくる」その内容が「おことはいづく如何なる人ぞと。父の名字をも國をも」で、付句の「迷ひ子」は「幼き者」、人商人に買われ奥州へ下る途次病を得た末に、所へ遺棄され捨て子の身となる。「迷ひ子」が梅若丸と異なる点は只「ひた泣きに泣く」ところ。

梅若丸から時は下つて、貞享元年<sup>1684</sup>の秋、亡母の展墓を兼ねた東海道上りの旅の折、富士川辺りで捨て子に行き合った芭蕉が、一曲中の「この邊の人々」と違い、「汝が性のつたなきをなけ」と「袂より喰物なげてとをる」と綴ったのは『野ざらし紀行』<sup>注11</sup>。

会者定離が世の常なれば、手厚き情を寄するものも、逆に非情を示すのも共に人心というものである。不幸なのは孰れにしても親と逸れた「迷ひ子」や拐されて捨て去られた「迷ひ子」であることに間違いがない。

「隅田川」梅若の面影を付句に認めればその付け筋は併げ付であるが、二ノ懐紙裏十三、十四句目の「枝少く花まばらなる梅一木／念佛の鉦の牙え返りがち」に比べて、面影の度合いは随分稀薄であり、折が異なるので差合は免れている。仮りに百歩譲るにしろ、前者が梅若追善供養の大念仏、後者は「迷ひ子」を展開させて行き着いた末の梅若である。

花前の句。

注1 コトバこれは直江の浦の御物語。ここに山岡の太夫と申して、人を売つての名人なり。さても昼の上臈たちに、お宿を申し損なうて、腹立ちや。たばかり売りにて、春過ぎをせうと思ひ(略)

(新潮日本古典集成『説経集』へ室木弥太郎校注、昭52・1・10、84頁)

この他にも、

なう、いかに上臈様。(略)あの太夫と申すは、七つの時よりも、人買ひ船の相櫓を押し、人売りの名人なり(略)

(同前書、88頁)

又、さんせう太夫についても、

殊に哀れをとどめたは、さて宮崎の三郎が、きやうだいの人々を、二貫五百に買ひ取つて、あとよ先よと売るほどに、ここに丹後の国由良の港のさんせう太夫が、代を積つて十三貫に買うたるは、ただ諸事の哀れと聞えける。

太夫はこの由御覧して、「さてもよい譜代下人を、買ひ取つたることこのうれしやな。孫子・曾孫の末までも、譜代下人と呼び使はうこ

このうれしきよ」と、喜ぶこと限りなし。

(同前書、95頁)

と、人商人の横行と人身売買、拐しを物語る。

2 四番目物、一段劇能、『能本作者註文』は世阿彌作とするが、『二百十番謡目録』は元雅作とする(共に名著全集『謡曲三百五十番集』所収、各々777頁、785頁)。尚、『五音』には元雅作とある(『世阿彌集』へ小西甚一編著日本の思想8、筑摩書房刊、70・7・25、収、370頁)、従うべきか。<sup>補注1</sup>

ワキ 隅田川渡守、ワキツレ 都の者、シテ 梅若丸の母(狂女)、子方 梅若丸の亡霊<sup>補注2</sup>

補注1 佐成謙太郎は『謡曲大観』第三卷、同曲解説で『世子六十以後申樂談儀』を引き「世阿彌の作に違ひなからう」(151頁)と述る。

『日本古典文学大辞典』は元雅作と載せる(第三卷、556頁)。

2 『申樂談儀』へよろづの物まねは心根成べし』の條に、

隅田河の能に、内にて、子もなくて、殊更面白かるべし。此能は、現はれたる子にてはなし。亡者也。ことさら其本意を便りにてすべし、と世子申されけるに、元雅は、えすまじき由を申さる。かやうのことは、して見てよきにつくべし。せずは善惡定がたし。

とある点が注目される。

(岩波古典文学大系65『歌論集 能樂論集』へ久松潜一 西尾實校注、

昭36・9・5、所収、497頁)

尚、佐成は右の條をもって世阿彌作と推定する根拠となすが不審。尚、母子別離の四番目狂女物としては他に「櫻川」がある。ワキツレの男を人商人とするが山岡太夫のように言葉巧みに拐すそれと違う一面が名ノリから窺える。<sup>補注3</sup> 子方 櫻子も梅若と異なり母の窮状救わんため自ら進んで人商人に身売りをする。<sup>補注4</sup>

人商人をワキ・ワキツレとする曲は観阿彌の「自然居士」が唯一のものであり、シテ自然居士と問答するなど存在感ある役柄になっている。<sup>補注5</sup>

補注3 男「かやうに候者は。東國方の人商人にて候。われ久しく都に候

ひしが。この度は筑紫日向に罷り下りて候。又昨日の暮ほどに幼き人を買ひ取りて候。かの人申され候は。この文と身の代とを。

櫻の馬場の西にて櫻子の母と尋ねて。確かに届けよと仰せ候程に。唯今櫻子の母の方へと急ぎ候。

〔謡曲大観〕第二巻、1224～1225頁、傍点引用者、以下同

4 シテ『さてもさてもこの年月の御有様。見るもあまりの悲しさに。

「人商人に身を賣りて。東の方へ下り候

〔同前書、1226頁〕

5 四番目物、一段劇能。

狂言 雲居寺門前の者、シテ 自然居士、子方 女兒、ワキ 人

商人、ワキツレ 人商人

人商人の名ノリ、

ワキ「かやうに候者は。東國方の人商人にて候。われこの度都に上り。數多人を買ひ取りて候。又十四五ばかりなる女を買ひ取りて候が〔略〕

〔同前書、1329頁〕

の詞章は「櫻川」と同じ型であり常套表現、同様に「東國の人商人」が都で身分賤しからざる者の幼きを買ひ、鄙に下り然るべき求める者に売るといふのが型である。

都から鄙が人商人の流通経路といつてよい。

又、以下のワキの詞、

ワキ「さん候われらが中に大法の候。それをいかにと申すに。

人を買ひ取つて再び返さぬ法にて候程に。得參らせ候まじ

〔同前書、1336頁〕

から、人商人の組織的活動のさまが想像しうる。「さんせう太夫」に、

一艘は「多どの二郎が舟」、一艘は「宮崎の三郎が舟候」と申す。「おことが舟はたが舟ぞ」。「これは山岡の太夫が舟」。「あら珍しの太夫殿や。商ひ物はあるか」と問ひければ、「それこそあれ」と片手を差し上げ、大指を一つ折つたるは、四人あるとの合点なり。「四人あるものならば、五貫に買はう」と、はや値さす。宮崎の三郎がこれを見て、「おことが五貫に買ふならば、それがしは先約束にてあるほどに、一貫徹いて六貫に買はう」。我買はう、人買はうと口論する

〔注1該書、90頁、傍点引用者〕

とあるのも同然。符牒の存在や注文を受けての売買や人買出没の風聞等々が「自然居士」中の「われらが中に大法の候」即ち掟の存在に通じる。

因みに、謡曲「隅田川」を句材とした子規句をいくつか挙げる。

明治二十八年の「寒山落木 四」〔全集〕第二巻収〕より、

角田川 謡曲

春風や狂女のりあふ渡し船

角田川 謡曲

曉の陽炎とこそなりにけれ

謡曲隅田川

夕暮の狂女静まる柳かな

矢張り子方が演ずる梅若丸は亡霊ゆえ正対して詠まれず、シテの母

（狂女）が詠み易いと思われる。が、

木母寺や實櫻落ちて児もなし  
の「児」は明らかに梅若丸を詠む。

又、「蟲鳴くや梅若寺の葭簀茶屋」なる句も同じく「落木 四」にあるが謡曲と離れた詠、山内外の秋景である。

明治二十三年の「つゞれの錦」第六號『全集』第三卷収「寒山落木拾遺」に、

月花のつかさや隅田のわたし守  
なる一句を認む。

子規以外で目につく梅若句では虚子『虚子句集』(岩波文庫版、虚子目選)収、五百五十句時代)に、

語り傳へ謠ひ傳へて梅若忌  
忌日あり碑あり梅若物語

があり、縁りの木母寺句では其角に、  
木母寺に歌の会ありけふの月

の一句あり。柳居に「木母寺へ世を通るゝや涼み船」、晚台「木母寺の灯に見る秋の行へ哉」、蓼太「木母寺を力なりけり秋の暮」が例句としてある程度、総じて少ない。

『江戸名所図会』は(隅田川東岸)の挿絵を載せ(ちくま学芸文庫該書6、230~231頁)、その画中に先きの其角句と共に道與准后『廻国雜記』

(『群書類従』第十八輯収、695頁)から、

(かくて隅田川のほとりにいたりて。みなく歌よみて披講などして。)いにしへの塚のすがた。哀れさ今のごとくにおぼえて。

古塚のかけ行水のすみた川聞わたりてもぬるゝ袖かな  
の個所を載せる(但し右引用文中の括弧内省略)。

3 『江戸名所図会』(ちくま学芸文庫該書6)所収の(梅若丸の塚)の条から紹介しておく。

縁起に云く、梅若丸は洛陽北白川吉田少将惟房卿の子なり(略)五歳にして父に後れ、七歳の年比叡の月林寺に入りて習学せり。またその頃東門院といへるにも松若丸といふ児ありて、日頃才のほどを挑み争ひけれども、梅若丸にはおよばざりけり。さるを、かの坊の法師ばら口惜しきことにおもひ、はては鬭争のこと出で来にければ、梅若丸は潜かに身を遁れて北白川の家に帰らんとし、吟ふて大津の浦に至る。頃は二月二十日あまりの夜なり。しかるに陸奥の信夫藤太といへる人商人に出であひ、藤太がために欺かれて、遠き東の方に下り、からうじてこの隅田川に至る。時に貞元元年丙子三月十五日なり。路のほどより病に罹り、この日つひにここにおいて身まかりぬ。いまはの際に和歌を詠す。

尋ねきてとはばこたえよ都鳥すみた河原の露と消えぬと

このとき出羽国羽黒の山に、下総坊忠円阿闍梨とて貴き聖ありけるが、たまたまここに会し、土人とともに謀りて、児の亡骸を一堆の塚に築き、柳一株を殖多て印とす。翌年の弥生十五日、里人集まりて仏名を称へ、児のなき跡をとむらひ侍りけるに、その日梅若丸の母君(略)、児の行衛を尋ね侘び、みづから物狂をしき様して、この隅田川に吟ひ来り、青柳の蔭に人の群れるて称名せるをあやしみ、舟人にそのゆゑを問ひ聞きて、わが子の塚なることをしり、悲歎の涙にくれけるが、その夜は里人とともに称名してありしに、その塚のかけより梅若丸の姿髣髴として、幻の容を現し、言葉をかはずかと思へば、春の夜の明けやすく、曙の霞とともに消えうせぬ。母君は夜あけて後、忠円阿闍梨に見え、ありしことどもを告げて、この地に草堂を営み、阿闍梨をここにをらしめ、常行念仏の道場となして、児の亡き跡をぞ弔ひける。

(当該書、236~237頁)

詳しくは、『日本伝奇伝説事典』（角川書店刊、昭61・10・10）、141頁、梅若丸の項（林和利項目執筆）参照

4 歌舞伎・浄瑠璃の戯曲構成の要素の一をさす作者用語。創作にあたり、戯曲の背景となる時代、または一定人物群の類型に対して、こう命名した（略）（『演劇百科大事典』3、360頁、当該項目（金沢康隆執筆）参照）

『世界綱目』（国立劇場・芸能調査室編『狂言作者資料集（一）』『世界綱目』・『芝居年中行事』）へ歌舞伎の文献・6（昭49・3・31）より引く（該書、55頁）。

角田川

役名 吉田少将惟定 山田 三郎 松井源吾

雀 子 梅若丸 松若丸

栗津六郎利兼 桑平内兵衛 人買惣太

は ん 女

義太夫 角田川狂女

双子隅田川 （雙生） 本朝 瓊房 （瓊女）

秋夜長物語（略）

5 元禄十四年1701三月、江戸中村座初演、梅若（水木姫之介）山岡太夫（山中平九郎）吉田少将（村山四郎次）継母來壽院（左近伊兵衛）少将妹織姫（市川竹之介）班女（澤村小傳次）栗津六郎（市川團十郎）。絵入狂言本、

高野辰之・黒木勘藏校訂『元禄歌舞伎傑作集 上巻』（早稲田大學出版部刊、大14・6・25）所収、379〜409頁

同狂言について鳥越文蔵は「梅若丸の流浪や悶死も描いているが、先行の謡曲や浄瑠璃などの影響はほとんど認められない」が「作者としての初世団十郎の非凡さを示す作品である」と評価する（『演劇百科大事典』3、177頁）。

6 享保五年1720八月三日、大阪竹本座上演。本曲は「四段目の謡曲「隅田川」にもとづく愁歎場面など、うれいが大きな見せ場であるが、幻妖

味やおかしみ、多くの景事などが盛り込まれ、変化の多い作品である。宇治座でも上演され小説・歌曲へも影響しているが、特に歌舞伎に与えた影響が大きい」と信多純一は指摘する（『演劇百科大事典』5、64頁）。

補注1 『正本近松全集』第二十一巻（勉誠社刊、昭58・9・30）所収、鶴

見誠の本曲解説（解題編、1〜10頁）参照。尚、同解説の中で梅若遺跡に關し、春日部の満蔵寺の梅若堂の方を「信ぜられる」と指摘する点が注目される。

7 天明四年1784五月十三日、大阪藤川菊松座（角）初演。四幕七場、世話物。

吉田家の御家騒動に梅若伝説、鏡ヶ淵伝説等を仕組む。詳しくは、名著全集『歌舞伎脚本集』所収、守隨憲治の解説（該書、67〜81頁）参照。主人公法界坊の破戒無慚な悪の性格と三枚目風な役所が人気を博す（服部幸雄他編『歌舞伎事典』当該項目（目代清執筆）、240〜241頁）。

8 嘉永七年1854三月一日、江戸河原崎座初演。三幕。忍ぶの惣太（四世小團次）吉田梅若（沢村由次郎）後の二世田之助）吉田の班女御前・惣太女房お梶（四世團之助）他。序幕の向島三田稻荷前、梅若殺しが名高い。詳しくは、『名作歌舞伎全集』第二十三巻（東京創元社刊、昭46・12・25）所収、河竹登志夫による解説参照。他に『歌舞伎事典』当該項目（落合清彦執筆）、『演劇百科大事典』5の当該項目（河竹繁俊執筆）等々。

9 原作 野津忠二、脚色 池田忠雄、撮影 野村昊

文吉 斎藤達雄、鉄坊 青木富夫（突貫小僧）、親分権寅 阪本武

10 佐成謙太郎著『謡曲大観』第三巻、1526〜1528頁

11 当該の条を引く（『校本芭蕉全集』第六巻（富士見書房刊、平元・6・30）、53〜54頁（振り仮名省略）

富士川のはとりを行に、三つ計なる捨子の哀げに泣有。この川の早瀬にかけて、うき世の波をしのぐにたえず、露計の命待まと捨

置けむ。小萩がもとの秋の風、こよひやちるらん、あすやしほれんと、袂より喰物なげてとをるに、

猿を聞人捨子に秋の風いかに

いかにぞや汝、ちゝに悪まれたるか、母にうとまれたるか。ちゝハ汝を悪にあらじ、母は汝をうとむにあらじ。唯これ天にして、汝が性のつたなき(を)なけ。

たゞ迷ひ子のひた泣きに泣く

うかれけりいつしか暮れて花に月

前句の「迷ひ子」に対しその「うかれ」親で応じた向い付けである。

親は親ながら、我子ゆえ物狂いとなった女親と違い、付句は子ならぬ「花」に「うかれ」狂う男親である。

花見に「うかれ」、花見酒に酔い「うかれ」、花見の雑踏に「うかれ」、時過ぎ行くも知らぬ氣に「うかれ」「うかれ」ているうちに、いつしか月出の刻、春の朧ろにまたぞろ「うかれ」し紅燈の下、年に一度の桜狩りに現を抜かず。先き程までは確かに我子傍らに居たはず、その我子気付けば姿見当らず、「迷ひ子」ならぬ迷い親。子は、と見れば「ひた泣く」「迷ひ子」、近くにいた花見客らが「口々に問ひかく」れど、子供は親に逸れた不安と怖しきから「たゞ」「泣きに泣く」のみにして一向要領得ぬまま刻だけが徒らに移ろう。

交番やこゝにも一人花の酔注1

右一句、「うかれ」た迷い親の姿でもあろうか。

かかる人の世の徒事を余所に、古来から賞翫されてきた風雅の象徴たる「月」「花」は自若として在るが儘。「うかれけり」という人情と「花に月」たる大自然の非情、月次ながら「国破山河在 城春草木深」の一句に具象化対照化された人為と自然の営みの無常が「うかれけり」の一語で滑稽へ転化、風詠された。手法としては芭蕉句の二番煎じ。

「春の心はのどけからまし」と詠んだ業平ならずとも、桜花が人心を惑わし乱し浮きたたせると共に自然美の確たりし景物なることについて異論はない。

「桑門の乞食巡禮ごとき」と戯画化した〈予〉も、奥州行脚の旅立に臨み「若生て歸らばと、定なき頼の末」を想い、「上野・谷中の花の梢、又いつかはと心ぼそし」と綴り、「花の雲鐘は上野か淺草歟」の一句を得たのも、「住替る代ぞ雛の家」と詠じたのも深川の草庵でのこと。孰れも対岸、江都花の名所の景色。

子規の花の句にも、

櫻狩上野王子は山つゞき

観音の大悲の櫻咲きにけり

門前に兒待つ母や山櫻

錢湯で上野の花の噂かな

観音で雨に逢ひけり花盛

上野

花の山鐘樓ばかりぞ残りける

(明29)

病中

寝て聞けば上野は花のさわぎかな

(同)

池の端に書畫の會あり遅櫻

(明32)

上野

銅像に集まる人や花の山

(同)

上野は花盛學校の運動會は、

日毎絶えざる此頃の庵の眺

松杉や花の上野の後側

(明34)

母の花見に行き給へるに

たらちねの花見の留守や時計見る

(明35)

花の宿くたびれ足を按摩かな

(同)

千本が一時に落花する夜あらん

(同)

等の、上野浅草の詠ある。

根岸の子規庵、平出隆によれば「言門通りを東へ一キロ余り行けば浅草

界限に至るところにある。すなわち、上野も浅草も睨めるほどの位置にあ

る」<sup>注7</sup>由。

『小園の記』<sup>注8</sup>にも「園は家の南にありて上野の杉を垣の外に控へたり」

とあり、上野の森、指呼の間なりしことを知る。

二百年余の時を経て、大川を隔てた深川芭蕉庵と根岸子規庵、共に東

都第一の花の名所上野に近きことに奇しき縁を覚える。

風流韻事が珍重する景物としての外にも花は人心を「うかれ」させ、名

所へ誘い宴を催させもする。

浮世そのものを草子仕立てとなした西鶴の『好色五人女』卷一「姿姫路

清十郎物語」◎太鞍に寄る獅子舞は、お夏清十郎が初めて情を交わす場

の背景に「高砂の尾上の桜」を配し、花見風俗の華やきを演出して以下の<sup>注9</sup>ごとく描く。

尾上の櫻咲て人の妻のやうす自慢、色ある娘は母の親ひけらかして、花は見ずに見られに行は今の世の人心なり(略)但馬屋の一家、春の野あそびとて、女中駕籠つらせて、(略)高砂、曾祢の松も若縁立て、砂濱の氣色又有まじき詠ぞかし(略)松露の春子を取など、すみれ、つばなをぬきしや、それめづらしく、我もとりくくの若草、すこしうすかりき所に花菫、毛氈しかせて、海原靜に夕日紅、人々の袖をあらそひ、外の花見衆も藤山吹はなんともおもはず、是なる小袖幕の内ゆかしく、覗をくれて帰らん事を忘れ、樽の口を明て酔は人間のたのしみ(略)此女中をけふの香とてたんとうれしがりぬ。こなたには女酒盛、男とては清十郎ばかり、下と天目吞に思ひ出申て、夢を胡蝶にまけず(略)前後もしらず有ける

爛漫たる春景、花見幕を引き廻しての野遊び花見の宴、所へ花見客相手に曲太鞍大神楽が来懸り、皆々それを囲んで一段と浮れ興する。華やかな当代花見の情景の一齣。

この他にも、『西鶴諸国ばなし』卷四◎「忍び扇の長歌」<sup>注10</sup>や『西鶴置土産』卷二「人には棒振虫同前に思はれ」<sup>注11</sup>の中で、東都の桜の名所上野の山に言及ぶ。

下つて文政九年<sup>1826</sup>、岡山鳥著編『江戸名所花暦』<sup>注12</sup>は上野東叡山、墨堤の桜を共に「東都第一の花の名所」に挙げ、殊に東叡山の桜に関しては戸田茂睡の『紫の一本』の当該箇所を引用し、盛んなる花見の様子を伝える。



先きに引いた西鶴『五人女』にはぼ重なる町人世界の賑かな桜狩り、花見の景色。小道具建ての点で現代と多少違えどその雰囲気や人気に通底する「うかれけ」る本質は変わらない。

東叡山、黒門より二王門の並木の櫻の下には花見衆なし。東照宮の御宮の脇後松山の内清水の後に、幕はしらかして見る人多し。

幕の多き時は、三百餘あり、少き時は二百餘あり。此外連立たる女房の上着の小袖、男の羽織を、辨當からげたる細引に通して、櫻の木に結び付てかりの幕にして、毛氈花むしろ敷きて酒飲むなり、鳴物は御法度にて鳴さず、小歌淨瑠璃躍仕舞は咎むる事なし、本町通町を始め、有徳なるもさもなきも、町方にては女房娘、正月小袖と云ふは仕立ず、花見小袖とて成程手をこめ、伊達なるもの數奇に好みたるを着て出るなり、花より猶見事なり、花の頃は空くもりて、大形晝過ぎより雨降る、然れども笠をもささず、小袖をぬらし歸るを、遊山にも又手柄にもするなり、どんどろめきの石橋からは、なか／＼先へは行かれず(略)四方からの集まりなれば、ひしと詰りて動きはたらきもならず(略)上野の込合夥しき事なり、されども御法度を守り喧嘩口論なし(略)

花見幕を青シート、小歌云々を携帯用カラオケと読み替えればその儘今日の花見、むしろ規則を守る点からいえば随分大人である、といつてよい(記述そのものを割引いて考えても)。

長谷川雪旦画く挿絵は常套の図柄を出ぬものの、山内の清水観音堂秋色桜図中に記される、同桜の命名に与った秋色の一句、<sup>注13</sup>

井戸ばたの桜あふなし酒の酔ひ

は、付句の「うかれけり」の気分に通い、同じく図中の芭蕉句、

木のもとに汁も鱒もさくらかな<sup>注14</sup>

もまた花見風情に叶う一句である。

他に、新吉原、谷中感応寺、飛鳥山、玉川上水堤金橋など、加えて多くの社寺を桜の名所として『花暦』は紹介するが、中でも特異な名所は廓で有名な新吉原中の町の桜である。

花街と桜の付会、<sup>注15</sup>ながら連句(歌)の付合い見ることくなるがゆえ、明和五年<sup>1768</sup>刊の評判記『吉原大全』(醉郷散人)から引く。

花を植る事むかしはなかりしに、寛保元酉ノ年思ひ付てうへ初たり、もろこしにてはけいせい丁を、花街あるひは花柳苑など稱して、花と柳はうゆる事なり、さすればこの里に花をうゆる事古實にかなひて、まことにはんゑいのしるしといふべし、大門口より水戸尻まで青竹をもつて欄干をつくり、桃櫻あさがすみにいろをまじへ、春風にかほりて衣にうつるふぜい、げに羣玉瑤臺の仙境も、いかでかこれにまさるべき(略)

「三月上巳花にてことにぎやかなり」と謳われた現世の観音浄土か喜見城、その絢爛たる廓風情は『籠釣瓶花街酔醒』序幕、仲之町見初の場の道具建て、

本舞台、一面に平舞台。正面に青竹の手摺、所々に朝顔のぼんぼり。一面に桜の植込み、山吹のあしらひ。後ろ奥深に仲の町茶屋、

灯火りの書割。すべて吉原廓夜さくらの模様(略)

からも充分想像しうるところである。

又、飛鳥山の桜、花見の遊興の有様は瀧亭鯉丈の滑稽本『花暦八笑人』<sup>注18</sup>初編の、茶番の舞台としても知られる。

その冒頭(振り仮名適宜省略)。

福壽草の咲初しより、四季の花、盛たがへぬ時津風、静けき御代の春なれや、遅日をおくる、日暮里も、けふに飛鳥の人の山、茶瓶の行列三重も、壹升徳利のテントも、弾や謠への芝疊、浮世の塵の玉はゞき、はらふ片手は、おりづめの、勝負あらそふ、拳角力、幕の内外の合せもの、うときしたしき、へだてなく、チヨットおあひのお手もとも、はゞかりながら櫻かな。梢にむすぶ短尺も、思ひ／＼の花見月(略)

斯る花見風俗は明治の御代になっても同然、往時の東京風俗資料として貴重な『東京風俗志』下の巻、四季の遊賞<sup>注19</sup> 桜狩に依れば、

やがて春雨糸の如く降りて、何となう温もる頃には、彼岸桜咲きそむ、上野清水堂の辺よろし。名に高き秋色桜も枯木一株に昔の俤を留めぬ。桜は向島最も盛なり、長堤十里の桜、雲と見まがふばかりに咲き満ちて、花の天井を被ひたらんが如し。三冊の鳥居前より牛御前、長命寺の辺までいと盛りに、白髭、梅若の辺までも咲きに咲きたり。側は縹渺たる隅田の川水青うして、白帆に風を孕み、波に眠れる都鳥の櫓楫に夢を破られて、飛び立つ羽音も物たるげなり。待乳山の森・浅草寺の塔の影、いづれか春の景色

ならざる、実に帝都一の眺めなり。懸茶屋には絹被の芋、慈姑の串団子を陳ね、栄螺の壺焼なども鬻ぐ。百眼売・つけ髭売・蝶々売・花簪売・風船売など、あるいは屋台を据ゑ、あるいは立ちながらに売る。花見の客の雑踏狼藉は筆にも記しがたし。(明治

三年四月十五日の日曜日、向島にて警察官の厄介となりし者、賭博者二百五人、喧嘩九十六件、内内傷者六人、違警罪一人、迷児十四人と聞く、雑踏狼藉の状察すべ) 枕橋より先きは車を禁め、警官途を分ちて、往さ来るさの客を制す。今戸・白髭・橋場の渡船は沈まんばかりに人を積み、

名物桜餅、言問団子の店は、家の崩れんばかりに込あふ、実にこれ都人一年一度の桜狩、恥も世間もうち忘れ、風流なるは瓢を腰にし、下卑たるは樽を肩にす。会社員の一隊・仕立屋子供の一群、衣裳の揃ひ、あるいは手拭・日傘の揃ひに、思ひ思ひの敷奇を擬らし、中にも人の笑ひを買はんとてや、海蘿の上下に櫛木の大小を手挟み、一文字の大髷つけて、ノソリノソリとあるく、あるいは鬚むちや男の島田の鬘を被り、白粉こてこてにけはひし、友禪縮緬の娘衣裳に、緋の長襦袢の片肌ぬぎ、女帯をお太鼓結びにしてしやなりしやなりとねる、あるは大男の頭青く剃りて、河童に残し、萌黄の着物にこくもちの大紋つけたる童子姿、裾短かに脛下の馬足をあらはして興じあるくさまなど、そのたわけさ謂ふべからず、はた謂ひ難し。水上には花見船の一群、三絃太鼓うち鳴らしてさざめくもあれば、年少血気の壯者ばらは、花を眺めの外にして、端艇を競ふもあり。汀に近く徐かに泛べたる屋根船の一艘より、折々に漏るる爪弾きの音、心憎くも、なまめかし(略)上野の花は向島に比すれば見頃常に早し、清水堂・榎鉢山の辺殊によし。動物園・美術学校の前は、場広く桜の林なれば、遊客こ

にまた群集す。この辺の花見は、向島とやや趣を異にし、見物の人々、花の下に毛氈しき、重詰ぢゆうつづめうち開きてさざめく、やがては老若男女の別ちなく、一座総立ちとなりて、手を繋ぎあはせ、西洋鬼をなすもあれば、尻に繋がりて、子をとり子とをなすもあり、額の波あらし程の女が鬚も紊れ、帯も解けがちに、しどけなきさまとなりて、若き男と狂ふさまなど見るも浅まし。女のへべれけさへ少からざれば、まして男の呑みつぶれ、酒に性根を乱して暴行を極め、喧嘩吹きかくなれば、此方も負けず劣らずに争ひ、はては血を見ること、日にいくばくあるかを知らず、中にも機嫌上戸の、見る人を延きて、酒を強ふるも愛嬌あり。

飛鳥山は偏阪にありて、遊客他に比して少けれども、場広うして、山の上、花の下は、一面の芝生、筵を敷けるに同じければ、運動会の催しには最も適ひて、花時には一入多かり。花見の趣は上野に似たれども、また趣を異にす。簀懸すげの席を借りて、終日酒宴を開くが多かる中に、芸自慢の若者ばら、人見よがしに手踊などして興ずる、厭味たつぷりの風情、見るもなかなか忌々しげなり(略)まことに花の都といひつべし。誰れやらんがいひしに、東京は花の都にして、京都は紅葉の都なりと、実にしかぞ寛ゆ。

恰も、花見現場からの画像中継見るごとくであり、とても子規存命中の花見風俗とは言い難く、今日の景そのものと言っても過言ではない。

『五人女』の高砂尾上の花見、『八笑人』の飛鳥山、そして〈花の都〉東京の所方方で繰り広げられる一年一度の桜狩りの狂躁振り。時代も場所も違えど日がな一日、行楽遊興飲食茶番歌踊りにと飲を為す。

李白を擬りていふなれば、

桜花爛漫木の下に会して

遊山の楽事を為す

群季の酔客は皆浮世又平「うかれけり」

吾人の茶番は遊客の耳目を驚ろかす

雑踏狼藉未だ盛んなれば

喧嘩口論その数を増す

花筵毛氈を敷き重詰開きて花に坐し

酒盃数を重ねて更に酔う

長閑なる春の一日「いつしか暮れて」

東の空の月朧ろ

雪こそあらねど「花に月」諸手に花の贅尽し

瓦斯燈ならぬ雪洞の紅き灯の艶にして

実に浮世は夢幻し戯けを為すこと幾何ぞ

とでもなるうか。

貴紳縉商淑女が集いし上流社会、鹿鳴館の仮装舞踏会は菊花薫りし天長の佳節、一方、庶民細民の輩は気心知れた仲間を誘い、互いに身銭切つての酒肴花見弁当工面して麗かな春の佳き日野天の桜狩り。これぞ彼らの fancy ball、文明開化の華たりし仮装舞踏会のパロディ、意匠を凝らした花見の楽事ならんや。

斯く解する時、前句の「迷ひ子」の中に鹿鳴館の名花と名を謳われた伯爵戸田氏共(旧大垣藩主)の妻極子(元勲岩倉具視長女)に纏わる醜聞注20、伊藤博文と密通との風説、噂を踏えた上で、夫以外の男に心「迷ひ妻」の「妻」を「子」に執り成す遊び心を読み解くも一興である。

付句は勿論芭蕉の、

うかれける人や初瀬の山櫻<sup>注21</sup>

を下敷にしてのものなること明白。

そして、同句は『千載和歌集』巻第十二 恋歌二 所収の源俊頼の一首<sup>注22</sup>

憂かりける人を初瀬の山をろしよはげしかれとは祈らぬものを

の誹諧化、第一句目「憂かりける」を「うかれける（浮かれける）」、三句目「山をろし」を「山櫻」にと、各々語呂合せ風に換った滑稽味が身上である。

更に、俊頼詠の前書「権中納言俊忠家に恋の十首歌よみ侍ける時、祈れども逢はざる恋といへる心をよめる」からも判る通り、「祈れども逢はざる恋」の風情をへ祈るを契機とし、へ観音へ初瀬と展じ、芭蕉句の前書「初瀬にて人々花みけるに」が語るように、花の名所へと通わせ貫之の梅ならぬ花見の浮れ心に収斂させたところが手際である。

当然子規はこうした仕掛けを知っていたに相違なく、「祈れども逢はざる恋」心を人目を忍ぶ恋、即ち密通と変換して「迷ひ妻」では余り直截に過ぎるゆえ「迷ひ子」と躲し、桜狩りに「うかれけり」と芭蕉句を以て受けた自在さは巧みな捌きであり、独吟の遊び心とはいえ詠み巧者である。  
三ノ懐紙裏十句目で月がこぼされたため、花の句に月を結んで詠む月花<sup>注23</sup>の句、季節は春。

注1 『全集』第十一巻、8頁。初出「日本」明治二十九年四月二十一日付

紙面、後に『松蘿玉液』に収める。

以下、同記事の一部抜粋、

○上野の花。いかにあらん。春の日和を獨りふすまの中に寐てあれ  
ば只だこお〜といふ音のみぞ聞ゆる。

寐て聞けば上野の花のさわぎかな

ある日稍々心よきまゝ車に扶け載せられて上野を巡りけるに綺羅の群衆花の陰に満ちて鬼事に餘念なくあるは鬼事を見てうつゝなし。いかばかりかうれしからん、風船さへ浮き〜として飛びたがる今日此頃。

新阪や向ふに見ゆる花の雲

古宮の櫻咲くなり杉の奥

黒門も摺鉢山も櫻かな

○向島の花。いかにあらん。紅雲十里黄塵萬丈の光景目の前にちら〜と見えて土手沈むこと三寸三分。

此花に酒千斛とつもりけり

花ちら〜島田の男酒を飲む<sup>補注1</sup>

交番やこ〜にも一人花の酔

補注1 一句、去來の

岩鼻やこ〜にもひとり月の客

を振っただけで手柄なし。只『去來抄』が伝える先師評に倣えば「花の酔」即ち花に酔うのは子規自身ということになる。

但し「二月ヨリ左ノ腰腫レテ痛ミ強ク只々横ニ寐タルノミニ

テ身動キダニ出來ズ、四月初メ僅カニ立ツコトヲ得テ暖日前

庭ヲ徜徉ス、快極マラズ、一日車シテ上野ノ櫻ヲ見テ還ル」

との述懐（『全集』第二巻収、「寒山落木 五」392頁）を見る時、

誰れ彼となく「こ〜にも一人花の酔」と名乗りたき心情解らぬ訳けでもない。恐らく生涯最後の桜狩りであつたらう。

「交番」という世俗が面白いといえはいる。

2 岩波新古典文学大系5 『古今和歌集』 33頁。

渚院にて桜を見て、よめる  
世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし

3 『おくのほそ道』(校本芭蕉全集)第六巻収(富士見書房刊)、101〜105頁、

〈旅立〉〈草加〉〈仏五左衛門〉の各章段参照

4 初出、貞享四年<sup>1687</sup>刊其角編『續虚栗』(『古典俳文学大系6』『蕉門俳諧集(一)』

〈集英社刊、昭47・1・10〉71頁)収

「花の雲」以外にも芭蕉句に、

花にやどり瓢箪齋と自いへり

(延宝八年、不卜編『俳諧向之岡』)

盛じや花に坐浮法師ぬめり妻

(延宝九年、言水編『東日記』)

上野、春興

花に酔り羽織着てかたな指す女

(同、梅人編『續深川集』)

観音のいらかみやりつ花の雲

(元禄十年、其角編『末若葉』)

酒のみ居たる人の繪に

月花もなくて酒のむひとり哉

(元禄二年、荷兮編『阿羅野』)

などあるを認む。

補注1 貞享三年の作、『末若葉』に「かねは上野か浅草かと聞えし前の

年の春吟也。尤病起の眺望成へし。一聯二句の格也。句ヲ呼テ句

とす」とあるを証とす。

6 高浜虚子選『子規句集』(岩波文庫)

7 「小園の図など」(岩波書店「図書」第六七五号(05・7)、62頁

8 『全集』第十二巻所収、235頁

9 岩波古典文学大系47『西鶴集 上』収、該書228〜230頁

よきほどの桜木に二張りの、裏梅鉢と二匹の胡蝶模様の花見幕を結び  
付け女酒盛の最中、天狗面を付けて籠摺る口取男、二人立ての獅子舞、

摺鉦、太鼓、大太鼓に笛、御幣を立てた山車引く男からなる大神楽の

芸人八人、但馬屋の女衆四人、そして幕内のお夏清十郎、裏梅鉢の幕  
の上縁に頭だけ見えるのが恐らく柴人、都合十五人。各々が本文に対  
応して挿絵が華を添える。

10 岩波新古典文学大系76『好色二代男 西鶴諸国ばなし 本朝二十不孝』  
収、該書350頁

屋かた住ひ、気づまりも、上野の花にわすれて、諸人の心玉うきた  
つ、春のありさま、衣裳幕のうちには、小歌まじりの女中姿、ほん  
の桜よりは、詠めぞかし。

11 岩波新古典文学大系77『武道伝来記 西鶴置土産 万の文反古 西鶴  
名残の友』収、該書294頁

うへ野の桜かへり咲して、折ふしの淋しきに、是は春の心して、見  
にゆく人袖の寒風をいとはず、何ぞといへば人の山、静かなるお江  
戸の時めきける。

12 市古夏生・鈴木健一校訂 該書(ちくま学芸文庫)巻之一 春之部  
〈桜花〉の項(32〜88頁)参照

尚、『紫の一本』本文引用は『戸田茂睡全集 全』(國書刊行會刊、大4・  
4・25)、284〜285頁 による。

13 竹内玄玄『俳家奇人談』巻之下 秋色 の項によれば、

秋色は武江の人、はじめ照降町菓子屋大目が妻たりし時は、お秋  
といへり。少小より風流の心ざしありて、十三歳の春上野の花見に  
行きて、清水寺観音堂のうしろ、井の端の桜を見て、

井戸端の桜あぶなし酒の酔

その頃の御門主、雅に切におはしけるが、木々に付けたる詩歌俳  
句を日々に収集め、甲乙を評し給ひしに、この句おしなべて、その  
頃の秀逸には極まりぬ。後代までも秋色桜と名に立ちしも、また宜

ならずや。晋子に入門の時、

蜺とり早苗に並ぶ女かな

つひに業成りて専門とす。

(略)

師叟終年放蕩にして所さためず、多くは秋色が家を主とす。ゆゑにその没後、しばらく師の点印を借り用ゆ。晩年に及んで湖十へこれとを伝与すといふ(略)享保十年四月、身まかりぬ。辞世、

見し夢の覚めても色のかきつばた

(雲英末雄校注『俳家奇人談 続俳家奇人談』〈岩波文庫、87・10・16〉、

144～145頁)

14 元禄三年三月二日、伊賀上野風麦亭興行八吟四十句の発句。尚、句形

の異同及び詞書きについては『校本芭蕉全集』第二巻 同句頭注へ大

谷篤蔵(11頁)、同全集第四巻 同句を発句となす八吟四十句他の頭注

〈宮本三郎〉(226～238頁)、『芭蕉俳句集』〈岩波文庫、中村俊定校注〉の

脚注(212～213頁)等々参照

15 『近世文藝叢書』第十(國書刊行會刊、昭51・6・10〈明44・9・30発行、

同叢書復刻版)収、該書109頁

16 同前書、111頁

17 三世河竹新七作、明治二十一年五月一日、東京千歳座(後の明治座)初

演、佐野次郎左衛門(初世左團次)兵庫屋八ッ橋(中村福助 後の五世歌右

衛門)繁山榮之丞(五世小團次)他。詳しくは『演劇百科大事典』2、

10頁参照。

田村成美編『歌舞伎年代記統続編』(鳳出版刊、昭51・11・1〈大11・11、

市村座刊の復刻版)は、

○今回演じる籠釣瓶に八ッ橋始め華魁が道中すると云ふ因みに依り

當前の川べりへ櫻を植込みお約束の楓山吹誰也行燈提灯等を掲げ

都て花街の模様を寫し茶屋の暖簾等も仲の町を當込みて新調したるものなり此狂言稀なる大當りにて當り振舞をも爲したる景氣なりし

と記す(同書、491頁)。芝居小屋の内外共に劇空間に仕立てるといふ傾き精神、遊び心がこの時現実に生きている。

舞台大道具建ての引用は『名作歌舞伎全集』第十七巻(東京創元社刊、

昭46・3・10)収の上演台本〈郡司正勝校訂〉による(116頁)。同様な道

具建ては『俠客春雨傘』第四幕第二場、新吉原仲の町出会の場にも認

められる。

補注1 福地桜痴作、明治三十年四月二十一日、東京歌舞伎座初演。詳し

くは『演劇百科大事典』2、237頁当該項目〈宮沢明執筆〉、『統続

歌舞伎年代記』750～752頁参照

2 (略)下手少し斜に青竹の囲いを廻らし、桜の植込、花盛りにて、

下には山吹海棠の下草ありて、所々に雪洞を附けたり。(略)天水

桶を置き、其先は下手より奥に掛けて仲の町の景色(中遠見火入

(略)総て仲の町花盛り夜の体なり。

(同全集当該巻、283頁)

18 文政三年<sup>1820</sup>刊。以下、天保五年<sup>1834</sup>刊の四編追加上下までが鯉丈作、第五

編上は一筆庵主人(浮世絵師溪斎英泉)、同中・下が與鳳亭枝成の作にし

て弘化四年<sup>1847</sup>仲冬成稿、嘉永二年<sup>1849</sup>刊行。

本文引用は、小池藤五郎校訂『花八笑人』(岩波文庫、昭46・6・10〈第四

刷)〉、21頁

19 平出鏗二郎、該書下(ちくま学芸文庫)、254～261頁。同書259頁の上野の花

見挿絵は中央に島田のボテ鬘に目かつらを着けた女装の男の浮れさま

を描く。

補注1 注5の芭蕉句の「花に酔り羽織着てかたな指す女」の傾き風俗と

好一對をなす。浮れ気分はいつの世でも変わらない。

20 前田愛『幻景の明治』収「三島通庸と鹿鳴館時代」(前田愛著作集 第四卷)〈筑摩書房刊〉79〜98頁) 参照

21 「初瀬にて人々花みけるに」の前書にて初出、寛文七年<sup>1667</sup>刊、『續山井』(北村湖春編)に〈松尾宗房〉の号にて入集(古典俳文学大系2『貞門俳諧集』)〈集英社刊、昭46・3・10〉収、536頁)

22 岩波新古典文学大系10、該書 216頁

23 詳しくは『俳文学大辞典』(角川書店刊)の当該項目〈宮脇真彦執筆〉、576頁、『俳諧大辞典』(明治書院)の中村俊定項目執筆、474〜475頁、等参照  
『連句辞典』(東京堂出版刊)が引く『俳諧小式』へ山岡元隣著、寛文二年<sup>1662</sup>初春の説く「又花の句に月を結てする事有。これを月花の句といふ。月は四季ともに有ゆへに花にひかれて春也。月花の句、一座に二句はなし」が最も解り易い。

うかれけりいつしか暮れて花に月

一夜の宿を雛にからばや

三ノ懐紙裏の折端、「雛」で春、春の二句目。

談林調な謡曲仕立ての付句。

例えば「鉢木」<sup>注1</sup>、ワキ旅僧(実は最明寺入道時頼)、所は上野国佐野、降りしきる雪に難儀せし旅僧、所の家に宿借らんとする折の着ゼリフ、

急ぎ候程に。上野の國佐野のわたりに着きて候。あら笑止や。また雪の降り來りて候。この所に宿を借らばやと思ひ候。いかにこ

の屋の内へ案内申し候

に続けて、ツレ佐野常世の妻の問い掛け「誰にて渡り候ぞ」に答え、

これは修行者にて候。一夜の宿を御貸し候へ<sup>②</sup>

右引用の詞章、傍線①の「この所に」を「雛に」替えて傍線②と結び付ければ即ち付句となる。

が、それでは余りに曲がない、というもの。

そこで、同様な詞章をもつ「江口」<sup>注2</sup>で付けの筋を考察してみる。

同曲は『撰集抄』<sup>注3</sup>や『西行物語』<sup>注4</sup>などで有名な西行説話のひとつ、一夜の宿を求めた折の、江口の遊女との和歌贈答を典拠とする三番目物、複式夢幻能である。

先ず、

月は昔の友ならば。月は昔の友ならば。世の外いつくならまし

という、天王寺参詣を志すワキ旅僧、ワキツレ從僧の語りで始まり型の如く、

江口の里に着きにけり江口の里に着きにけり

と道行を謡い、アイ所の者から此所が西行縁りの江口の遊女の旧居跡なることを聞く。

次いで、ワキサシ(旅僧の叙唱)となり、その語り、

さてはこれなるは江口の君の舊跡かや。痛はしやその身は土中に埋むといへども。名は留まりて今までも。昔語の舊跡を。今見る

事のあはれさよ。「げにや西行法師この所にて。一夜の宿を借りけるに。主の心なかりしかば。『世の中を厭ふまでこそかたからめ。』「假の宿りを惜しむ君かなと詠じけんも。この所にての事なるべし。『あら痛はしや候

傍線部①、希望願望の意を主観的に述べる終助詞「ばや」の「鉢木」と違い、第三者旅僧の語りの述懐ゆえ過去の助動詞「けり」が使われるが、意味内容の点で「鉢木」と大差ない。むしろ、文芸的という観点でいえば、西行・江口の遊女という素材の方が時頼・常世という素材より総じて豊かな想像性を内包するといつてよく、発想としても措辞の上からも直接的な「鉢木」に優る。

連句の運びに従えば、打越の「迷ひ子」が墨堤木母寺梅若伝説乃至は謡曲「隅田川」を呼び出し、三月十五日梅若供養の大念仏会を面影とし、名に縁りある梅花の「花」をもって前句、花の定座を満たす。同時に、この「花」は『古今和歌集』巻第一 春歌上収の貫之の詠首、<sup>注5</sup>「ひとはいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける」の「花」へ繋がる。そして、同詠首の前書、

初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に、久しく宿らで、程経て後に至れりければ、かの家の主、かく定かになむ宿りはあると、言ひ出だして待ければ、そこに立てりける梅の花を折りて、よめる

中の、〈初瀬〉と「かの家の主」への〈恋情〉を「憂かれけり」と詠む俊頼の一首を俳諧化した芭蕉句「うかれける」を踏え、風狂洒脱な「いつしか暮れて」と花見へ転じて見せたのが前句。それを受け、「ひとはいさ心

もしらず」と詠み掛けられた「家の主」に対して抱く、今だに残る淡き〈恋情〉が更なる恋を呼び、遊女へ逢着するのは筋道として当然であり、それは江口君であった。

室津、神崎でなく江口であるのは「花」の縁。「花」といえば直ちに歌僧西行が思い浮ぶ。

「たとへば歌仙は三十六歩也。一步も跡に歸る心なし。行にしたがひ、心の改は、たゞ先へゆく心なれば也」、「三冊子」<sup>注6</sup>が伝える先師の言説なれど敢てその禁を破り前に戻って見渡しをなせば、前句には「西行櫻」<sup>注7</sup>の影も見え隠れしている。

「西行櫻」は『山家集』<sup>注8</sup>上春 所収の、

しづかならんと思ける頃、  
花見に人々まうできたり  
ければ

花見にと群れつゝ人の來るのみぞあたら櫻の科には有ける

を曲想の拠り所とする劇的夢幻能。ワキ西行法師、狂言能力、ワキツレ花見の人々、シテ老桜の精（老翁）、所は都西山西行庵室、時は三月（春）。

当年庵室にての花見禁制との西行の命を事觸れた能力が笛前に着坐、と次第の囃子にてワキツレ花見の人々が登場、

ワキツレ次第  
（二回） 『頃待ち得たる櫻狩頃待ち得たる櫻狩山路の春に急が  
ん

ワキツレ「かやうに候者は。下京邊に住居仕る者にて候。さてもわれ春になり候へば。ここかしこの花を眺め。さながら山野に日を送り候。昨日は東山地主の櫻を一見仕りて候。今日は又西山西



行の庵室の花。盛りなる由承り及び候程に。花見の人々を伴ひ。

唯今西山西行の庵室へと急ぎ候 ワキツレ道行 (二同) 『百千鳥。囀る春は

物毎に。囀る春は物毎に。あらたまり行く日數經て。頃も彌生の、

空なれやや留まりて花の友。知るも知らぬも諸共に。誰も花な

る、心かな誰も花なる心かな

ワキツレ「急ぎ候程に。これははや西行の庵室に着きて候。暫く

皆々御待候へ。某案内を申さうするにて候

と、取次ぎを頼む花見の一人、先きの能力仕手柱の先へ出て花見禁制の旨を告げるが一応庵主西行に言問うてみんなといひ残り、再び元の笛前に着座。ややありて狂言能力、ワキ西行に向かいて事の次第を語る。

それを聞いた西行、

ワキ「何と都よりと申して。この庵室の花を眺めん爲に。これまで皆々來り給ふと申すか

ワキ「凡そ洛陽の花盛り。いづくもといひながら西行が庵室の花。

花も一木われも一人と見るものを。花故ありかを知られんことい

かなれども。これまで遙々來りたる志を。見せてはいかで歸す

べき。あの柴垣の戸を開き内へ入れ候へ

と、柴戸を開け遙々の花見衆を庵の内に招き入れる。この後、ワキツレと

ワキの詞が数言交わされる中で、ワキ西行の詞、

ワキ『われは又心ことなる花の本に。飛花落葉を觀しつつひとり

心を澄ます處に

と、花見禁制の理由が語られるが、花見衆の心情、即ち世俗の者の心の在り所はまた格別にして「貴賤群集の色々に。心の花も盛んにて」とその様を語る。

「頃待ち得たる櫻狩」「知るも知らぬも諸共に。誰も花なる、心かな」

と浮かれ歩く「洛陽」の人心は既述の西鶴鯉丈の浮世風俗と通底する。

「浮世の嵯峨に(筆者注・性を掛ける)」「隠れ家」なきことを知った西行、

花見衆に、

ワキ「いかに面々。これまで遙々來り給ふ志。返す返すも優しう

こそ候へさりながら。捨てて住む世の友とては。花ひとりなる木

のもとに。身には待たれぬ花の友。少し心の外なれば。『花見と

群れつつ人の來るのみぞ。あたら櫻の。とがにはありける

地「あたら櫻の陰暮れて。月になる夜の木のもとに。家路忘れて

諸共に今宵は花の下臥して夜とともに眺め明かさん

と語り、花見衆と共に「花に月」の風雅を賞でんことを誘う。

こうした世捨人西行の風雅を花見衆の「昨日は東山の地主の櫻」「今日

は又西山西行の庵室の花」と、「心の花も盛んにて」遊山する俗に「反転さ

せたのが前句であった。

打越・前句と続いた謡曲調を「初瀬」へ「西行」を面影とし、「江口」「西行櫻」で応じたのが三句渡りの付け筋となる。

大打越「田舎人皆口々に問ひかくる」の一句を境とし、それまでの開花

風俗を謡曲の世界に展し、その風韻を各々に通底、揺曳させながら、独り

須磨の地に「宿」り、無聊の慰めとする子規居士の面目躍如とした運び、

彼の該博広汎な知の深淵に臨むが如し、といえよう。

蛇足とも思える警言。

前句の「花に月」は、『おくのほそ道』<sup>注9</sup>市振での一句、「一家に遊女もねたり萩と月」の下五「萩と月」の連想が、そして付句にも同句の措辞「一家」「遊女」が機能、結果として西行「江口」、更に江戸長唄「時雨西行」<sup>注10</sup>へ繋がり、加えて宗因の「やどれとは御身いかなるひと時雨」<sup>注11</sup>や芭蕉の「草の戸も住替る代ぞ雛の家」を呼び出すという思考回路も当然想定されねばならぬ。

表現は単純明瞭（しかも付きすぎの感否めぬが）、意味も同然ながら、幾多の文学的素養知識が相互作用をなした末の、

一夜の宿を雛にからばや

という付句である。

「一夜」はへヒトヨと訓む。<sup>注12</sup>

「雛」に仄かな艶が匂い、恋が呼び出された。

注1 既出、「子規連句私解 其三」（学苑）74号、75頁参照。同曲詞章引用

は佐成謙太郎『謡曲大観』第四卷（2548～2571頁）による。

2 『能本作者註文』は世阿彌作女能に挙げるが、『二百十番謡目録』は氏信金春禪竹とする。又、『五音』は「江口遊女」と曲名を挙げ亡父観阿彌作とする。岩波古典文学大系40『謡曲集 上』（横道萬里雄・表章校注）は『五音』に従い観阿彌作とする。従うべきか。

前シテ 里の女（江口君の霊）、後シテ 江口君、後ツレ 遊女（二人）、ワキ 旅の僧、ワキツレ 同従僧、アイ 所の者

詞章引用は『謡曲大観』第一卷（474～487頁）による。

3 西尾光一校注『撰集抄』（岩波文庫、昭45・1・16）巻九第八「江口遊女

歌之事」（294～298頁）。

過ぬる長月の廿日あまりのころ、江口と云所をすぎ侍りに、家は南北の岸にさしはさみ、こゝろは旅人の往來の船をおもふ遊女のありさま、いと哀にはかなき物かなと、見たてりしほどに、冬を待えぬむらしぐれのさら暮し侍りしかば、けしがる賤がふせ屋にたちより、はれまつまの宿をかり侍りに、あるじの遊女ゆるす氣色の侍らざりしかば、なにとなく、

世中をいとふまでこそかたからめ假のやどりを惜む君かな  
とよみて侍しかば、あるじの遊女、うちわびて、

家をいつる人とし見れば假のやどに心とむなと思ふばかりぞ  
とかへして、いそぎ内にいれ侍りき。たゞ、しぐれのほどしばしの宿とせんとこそ思ひ侍りに、此歌のおもしろさに、一夜のふしどし侍りき。（略）

4 桑原博史全訳注、該書（講談社学術文庫、81・4・10）、第六章四三「江口の君」の条（198～201頁）参照

5 岩波新古典文学大系5、該書30頁

6 『校本芭蕉全集』第七卷（富士見書房刊）収、該書「白雙紙」167頁

7 三・四番目物、劇的夢幻能。『能本作者註文』、『二百十番謡目録』共に金春禪竹の作とするが、『申樂談儀』<sup>補注1</sup>により世阿彌と考えるのが大方である。

補注1 （略）西行・阿古屋の松、大かた似たる能也。後の世、かかる能

書く者や有まじきと覺へて、此二番は書き置く也

（岩波古典文学大系65『歌論集 能樂論集』収、該書515頁）  
本曲詞章引用は『謡曲大観』第二卷（1168～1180頁）による。

8 岩波古典文学大系29『山家集 金槐和歌集』収、該書34頁

9 該書同章より、

(略) 一間隔て面の方に、若き女の聲二人斗ときこゆ。年老たるおのこの聲も交て物語するをきけば、越後の國新瀧と云所の遊女成し(略)あした旅立に、我くむかひて、「行衛しらぬ旅路のうさ、あまり覺束なう悲しく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍ん。衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて、結縁せさせ給へ」と涙を落す。不便の事には侍れども、「我くは所々にてとまらる方おほし。只人の行にまかせて行べし。神明の加護かならず恙なかるべし」と云捨て出つゝ、哀さしばらくやまさりけらし。

一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば、書とゞめ侍る

紀行文中最も物語的構成に富む章である。行脚僧と遊女との一家(一夜)の邂逅、他生の縁。歌の贈答こそないが句を配す。明らかに謡曲「江口」を意識して構想された一章である。

10 素唄の新作。元治元年<sup>1864</sup>九月、河竹其水(後の黙阿彌)作詞、二世杵屋

勝三郎作曲(名著全集『歌謡音曲集』922-923頁)

11 有朋堂文庫『名家俳句集』(大3・9・28)収「松翁宗因発句集」に「旅行の道にて終日時雨にあひてある山里に行きいたりけるに下略」の前書あり(同発句集 16頁)

12 『邦訳日葡辞書』(岩波書店刊)、328頁。

Ichiya イチャ (一夜) 夜を教える言い方。

(おおしま とみお 日本語日本文学科)